

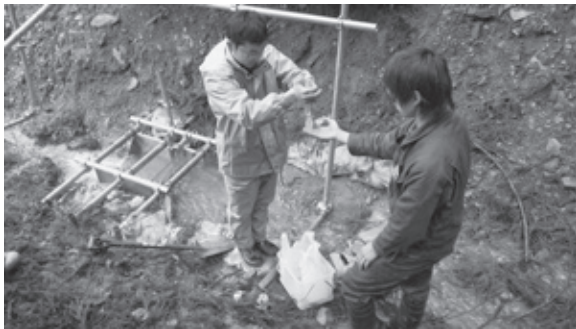
# 各施設年次報告

# 芦生研究林年次報告

芦生研究林長 長谷川尚史

## ●教育研究

2010年度における芦生研究林の利用者総数は延べ10,539名であり、ほぼ前年並みであった。実習等の教育利用者数は2,329名で、前年(2,157名)より増加した。そのうち学内利用が21件と2件減少したが、他大学の利用が5件で4件増加した。また研究利用者数は2,078名(前年度1,569名)であり、学内利用が35件、他大学等が27件であった。研究利用申請件数は年々増加しており、特に他大学の研究指導のためのフィールドとして利用されるケースも増えている。一方、フィールド研では平成21年度から文部科学省の概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」が行われており、芦生研究林下谷流域に間伐試験地が設定された。ここでは平成23年度に間伐を行うこととしており、本年度は間伐試験地における定期的な採水のほか、量水堰の設置および測量を行った。また近年、ニホンジカによる天然林植生の衰退が深刻となっており、様々な分野の研究者が主体となって芦生生物相保全プロジェクト(ABCプロジェクト)が組織されている。16haの集水域をシカ防護柵で囲うなどの大規模なシカ排除試験が行われており、芦生研究林職員も調査に協力している。本年度も冬期および春期における柵の撤去・再設置作業等に協力した。



森里海連環学による  
地域循環木文化社会創出事業



芦生生物相保全プロジェクト  
(ABCプロジェクト)

## ●社会連携

フィールド研主催事業として芦生公開講座「森のしくみとその役割」を、歴代演習林長を講師に迎えた第20回記念大会として開催した。また芦生研究林主催事業として「芦生の森自然観察会」を春と秋に企画した(秋は台風のため中止)。共同開催事業としては、森林体験学習(和歌山県立有田中央高校清水分校)、自然体験教室(美山町内小学校第4学年)、郊外森林体験実習プログラム(京都府立北桑田高校)、長期宿泊・自然体験推進事業(京都市内2小学校)が昨年引き続き行われた。公共団体等が主催する教育講座としては、地域の宿泊施設である芦生山の家、美山町自然文化村、針畑ルネッサンスセンターからのガイドツアーを受け入れたほか、NPO法人や地方自治体が主催する各種の市民講座へのフィールド提供と研究林内での講義、研修への協力などを行った。一方、グリーンツーリズムや環境問題に関する社会的関心の高まりから原生的森林を有する芦生研究林が注目され、取材依頼が急増した。本年は新聞への1年間の連載を含む報道関係や出版関係からの14件の取材申請があり、教育研究機関としての立場からそれぞれ取材に協力した。その他、南丹市日吉町森林組合において開催された森林生産システム研究会(177名)への後援を行った。



芦生公開講座「森のしくみとその役割」



自然体験教室

### ●施設の特記事項

平成22年度中国・四国・近畿地区大学附属演習林等技術職員研修が獣害・虫害防除をテーマに開催され、10大学14演習林から15名の参加者があった。従来、近畿地区が単独で行っていた研修を、中国・四国地区と合同で実施する初めての研修となったが、参加者の意識が高く、各演習林の被害状況の紹介や対処方法など、良い情報交換の機会となった。一方、全国の大学への実習科目提供の試行として、全国大学演習林協議会との連携事業である公開森林実習を企画したが、周知期間を充分に取ることができず応募者がなかった。そこで「京都大学公開森林実習近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴」を開催し、2大学から5名の参加者を集め、公開形式の学生実習の開催における諸課題を検討した。

教育利用において学生実習が減少した理由のひとつは、学休期間に学生実習を集中的に開催せざるを得ないことが挙げられる。学生実習用施設の定員は35人であり、大人数の学生実習や、同時に複数の学生実習を受け入れることは不可能である。実習開催中の研究宿泊利用を断るなどして対応しているが、今後は他大学の学生実習の受け入れ拡大も検討しており、宿泊施設の拡充と長期滞在者用施設の充実、さらには実習開催可能期間の延長のための除雪機能の拡充を図ることが、喫緊の課題となっている。社会連携においては、一般市民の芦生研究林の認知度は年々高まっており、京都大学の社会に対する窓口の一つとして重要な位置を占めつつある。本年度は、芦生をコアエリアにして国定公園化する案も公表された。しかし近年、過去のナラ枯れ被害木の倒木、枝の落下が多くなっており、場所によっては歩行が危険な状況となっている。現在、一般市民の入林ポリシーの見直しや一般入林可能エリアの再検討を行っている。



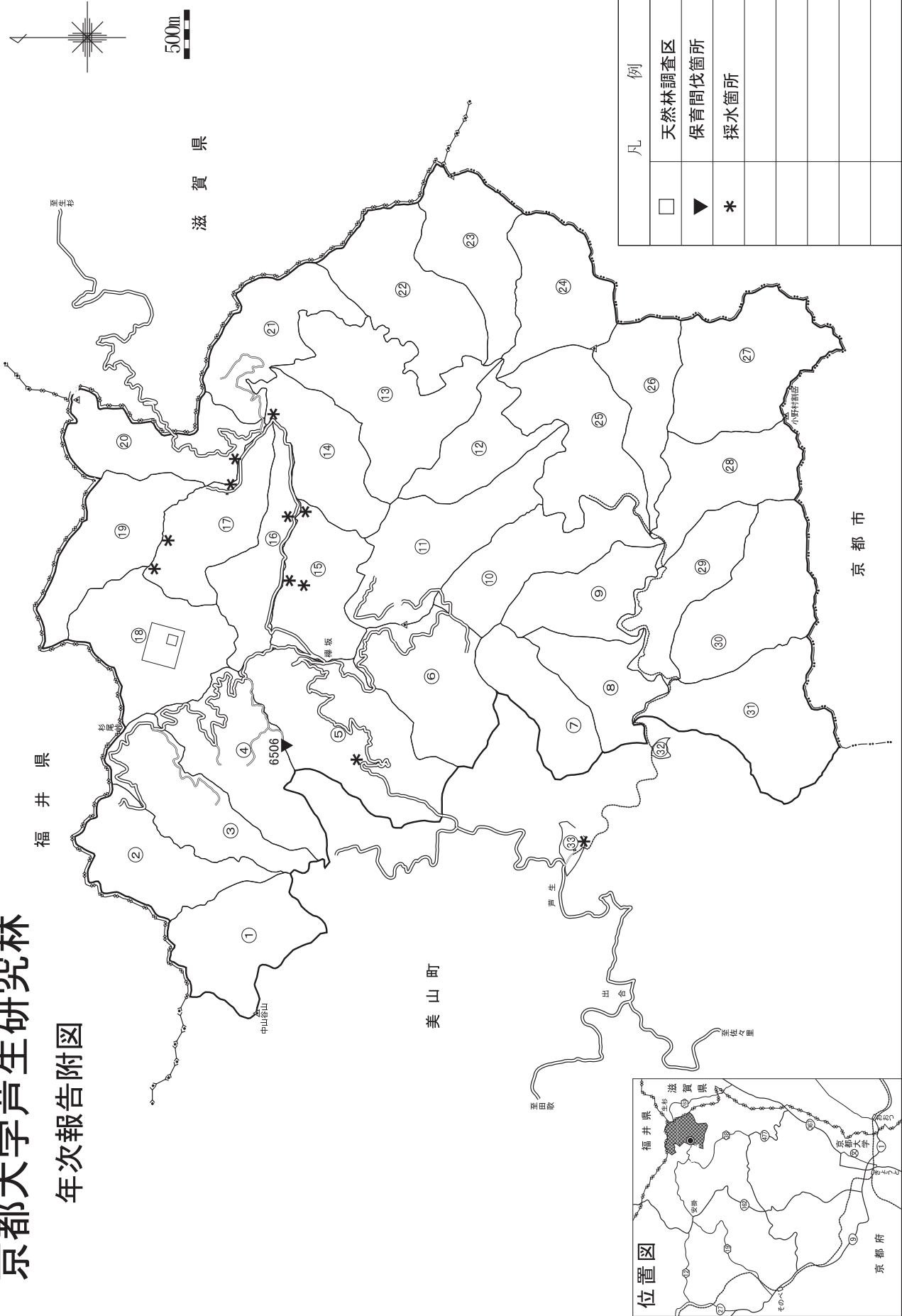
中国・四国・近畿地区大学附属演習林等  
技術職員研修



公開森林実習

# 京都大学芦生研究林

## 年次報告附图





## 北海道研究林年次報告

北海道研究林長 吉岡崇仁

### ●教育研究

北海道研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地理的特性を生かして全学共通および農学部の実習が年3回行われた。

「北海道東部の人と自然・研究林実習Ⅲ」は、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに間伐施業などを体験する。8月29日～9月5日の8日間、農学部、経済学部、総合人間学部の2～4回生18名が参加した。「森里海連環学実習C」は北海道大学と共同で行っているもので、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質・水生生物調査を通じて、森-里-海の繋がりを学ぶ。9月6日～9月12日の7日間、標茶管理棟と北海道大学厚岸臨海実験所を拠点に、本学理学部、農学部、総合人間学部の1～4回生8名と、北海道大学、工学部、農学部1回生6名の計14名が参加した。「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習Ⅳ」は、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学ぶ。2月21日～2月27日の7日間、農学部、文学部、法学部、総合人間学部、理学部、工学部1～4回生16名が参加した。



研究林実習Ⅲ（リスケ山山頂）



森里海連環学実習C（グループ発表）

### ●社会連携

「木工体験学習（沼幌小学校共催）」は、自然の中で木工工作を体験し、木工に対する興味・関心や自然に対する敬愛心を育てることを目的としている。6月22日に小学生9名が参加した。北海道研究林主催の夏休みミニ公開講座『自分だけの森の色見つけよう「自然観察・草木染め」』は、自然観察と構内にある植物を使つての草木染めを通して、自然界にある色の美しさや変化の面白さを体験してもらうことを目的とする。7月24日白糠区に小学生、保護者等13名と、標茶区は8月1日10名が参加して行われた（「主な取り組み」を参照）。



自然観察・草木染め

「しべちャアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座（標茶町教育委員会共催）」は、地元にある京都大学研究林を知るとともに、森林の役割や樹木の観察・識別法を学ぶことを目

的とする。11月6日～7日に小学生5名と、リーダーの高校生5名が参加した。さらに、「冬の野外活動」と題して、1月22日～1月23日にも実施され、ここでは、スノーシューを着用して冬の樹木の様子や雪上の動物の足跡を観察し、厳しい寒さに立ち向かう動植物の知恵を学ぶことが目的とされた。小学生8名が参加した。

### ●施設の特記事項

北海道森林整備加速化・林業再生事業の間伐事業として北海道研究林（標茶区）無間伐のカラマツ人工林16.99haについて、標茶町森林組合を事業主体として補助金事業を実施した。平成21～23年度に計画の林野庁の「緑の産業再生プロジェクト（森林整備加速化・林業再生事業）の補助金事業として取り組まれたものであり、国の出資金事業を北海道（各総合振興局）が補助事業の主体となり京都議定書の目標とする森林吸収量の達成に向け北海道全体で2万haを整備するという計画である。なお、間伐地は、補助事業実施後10年は施業対象地外となる。

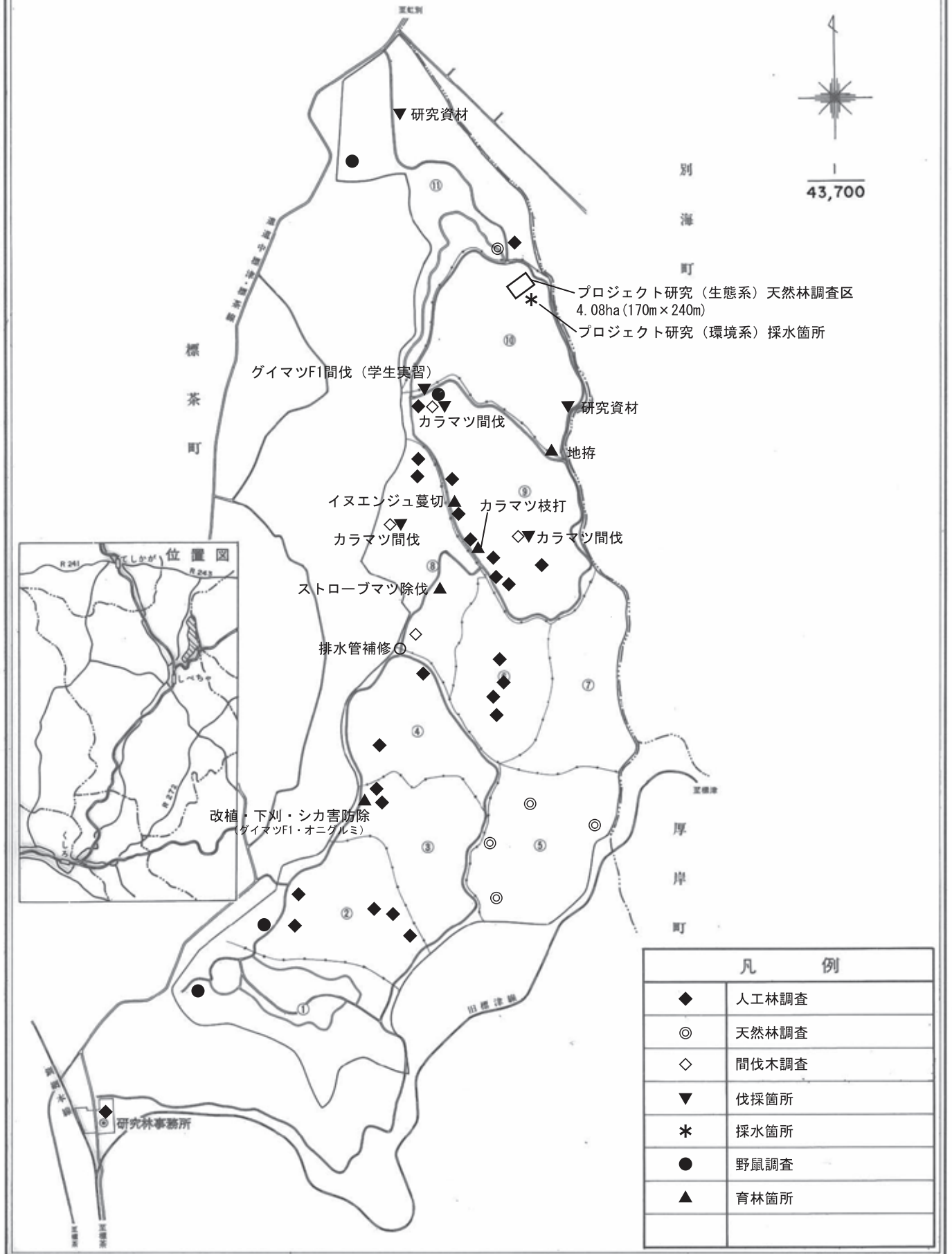
北海道林業試験場より研究課題「森林及び林業分野における温暖化緩和技術の開発」の中で、試験場が開発した炭素固定能の高いグイマツF<sub>1</sub>品種「クリーンラーチ」について、林分成長特性などを解明し二酸化炭素吸収量を推定する取り組みがあり、様々な環境下（場所）に試験地を設定し「クリーンラーチ」の環境適応性を明らかとするため、釧路地域において試験地を設定したいとの依頼があり、当研究林に試験地を設定することにした。22年度中に試験地の選定、区画測量、地拵、植栽詳細区画設定、無償提供されるクリーンラーチ以外の



クリーンラーチ外植栽予定地（地拵）

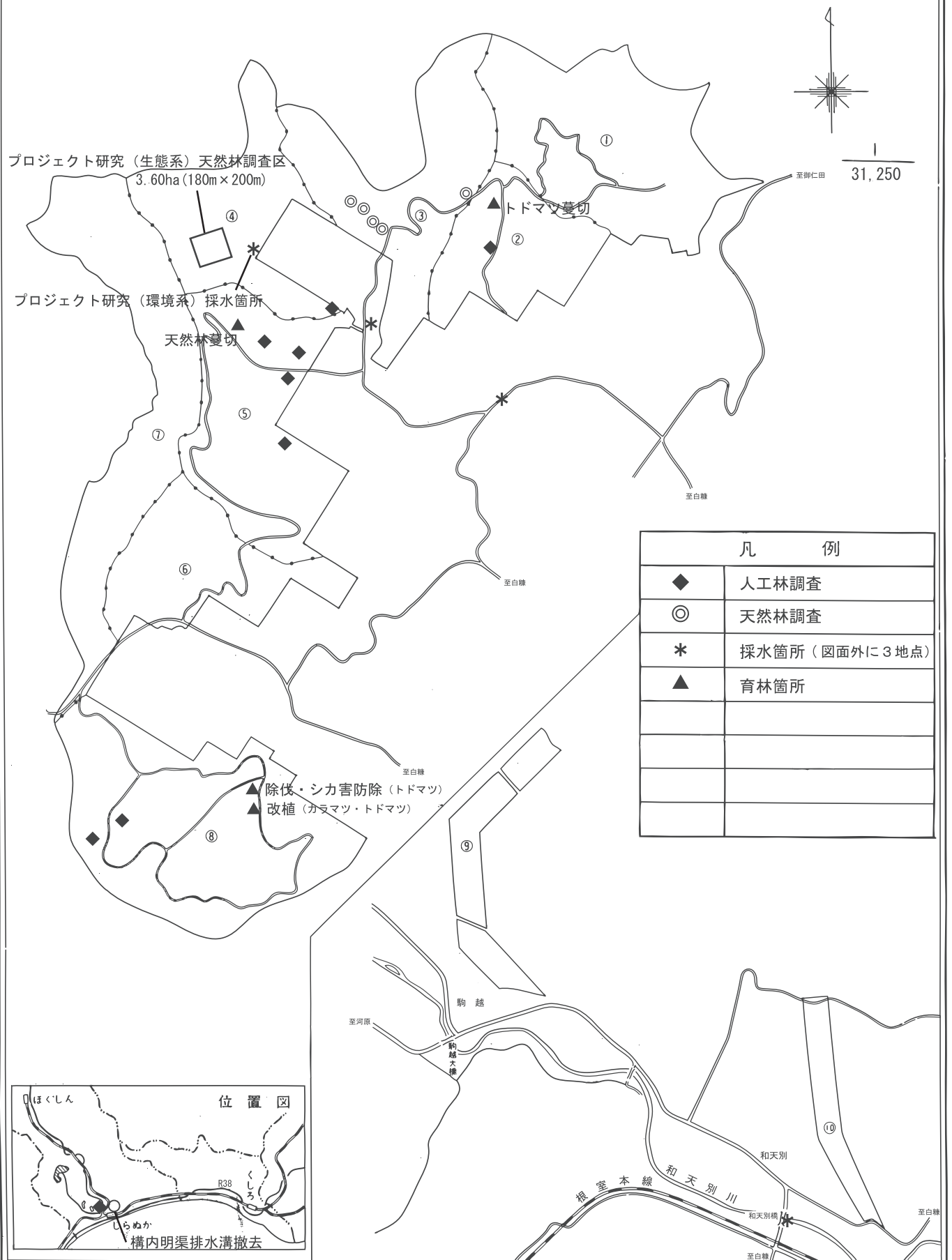
グイマツF<sub>1</sub>、カラマツの苗木の予約手配などを実施した。試験地は10林班ろ2の不成績造林地を分割し改植することにした。地拵面積は0.82haで実際の植栽面積は0.68ha、鹿柵設置のため管理面積を設けた。植栽は平成23年度に行う予定である。北海道研究林として試験地を提供し、事業に協力するとともに共同研究につなげて行くことで技術職員の様々な研究技術の向上に繋げていきたい。

# 京都大学北海道研究林標茶区 年次報告附図



凡 例	
◆	人工林調査
◎	天然林調査
◇	間伐木調査
▼	伐採箇所
*	採水箇所
●	野鼠調査
▲	育林箇所

# 京都大学北海道研究林白糠区 年次報告附図





## 和歌山研究林年次報告

和歌山研究林長 柴田昌三

### ●教育研究

和歌山研究林は、2010年度に16件の研究利用申請を受け付け、延べ519人日の研究利用を受け入れた。学内からの利用はフィールド研教職員や農学研究科、理学研究科、東南アジア研究所からの利用が中心であったが、学外からの利用も多く、名古屋大学高等研究院、名城大学農学部、東京農業大学生物産業学部、近畿大学農学部、東京大学大学院農学生命科学研究科、三重大学大学院生物資源学研究科、鳥取大学農学部、奈良女子大学共生科学研究センター、大阪市立大学大学院文学研究科、奈良教育大学が利用した。また学内霊長類研究所を介してアメリカ人研究者の利用も検討したが、予算的な問題からこの利用は断念された。大学関係以外からは、地元和歌山県下からのさまざまな研究者の利用も多かった。主な利用者の組織は、和歌山県立博物館、和歌山県立環境衛生研究センター、県教育庁生涯学習局文化遺産課、日本野鳥の会和歌山県支部、であり、県外からは(株)環境総合テクノスからの利用があった。

一方、教育利用としては10件、申請を受け、許可した。延べ339人日の利用があった。学内からの利用はフィールド研教員による少人数セミナーがあった。これ以外の利用は大阪府立大学大学院生命環境科学研究科による「緑地環境科学実験実習Ⅱ」、有田川町内の小中高等学校による各種体験学習であった。高校の利用は県立有田中央高等学校清水分校による授業である「ウッズサイエンス」とSHIMIZU TIME(森林ウォーク)と名付けられた授業の利用があった。ウッズサイエンスでは、年間を通じて合計23回の利用があった。中学校からは有田川町立白馬中学校から「森林体験学習」、同町立八幡中学校から「職場体験学習」の利用を受け入れた。小学校からは同町立八幡小学校から2つの授業、「森は友だち森林の町清水」、「森を守ろう」を受け入れたほか、同町立田殿小学校と同町立石垣小学校から「森とあそぶまなぶ」と名付けられた授業を受け入れ、それぞれに対して技術職員を中心とする対応が行われた。

### ●社会連携

社会連携事業のうち、和歌山研究林が主体的に行っている地元小中高等学校に対する連携事業はすでに述べたとおりであるが、このうち、田殿小学校と石垣小学校による授業は、有田川町産業課主催「紀の国森づくり基金活用事業」として実施した。

### ●施設の特記事項

2010年度には和歌山研究林は、念願のインフラストラクチャーの充実が進捗した。まず、インターネット環境の整備が2010年12月に完成し、光回線の導入により、本部地区と同等あるいはそれ以上のインターネット環境が実現した。また、2010年度事業として町のご理解により、事務所前までの未舗装道路3.0kmの舗装が開始された。舗装の完成は翌年度に持ち越されたが、その実現は間近である。

部局内措置としては、気象観測機器の整備が実施できた。これまで、観測機器が設置されていた場所は特に湿度が高いことから、高湿度環境における観測結果に疑問が持たれていたが、高湿度環境での観測にも対応した機器への更新によって、観測結果は改善されたと思われる。



ウッズサイエンス



森林体験学習（白馬中）



職場体験学習（八幡中）



森を守ろう（八幡小）



紀の国森づくり基金活用事業



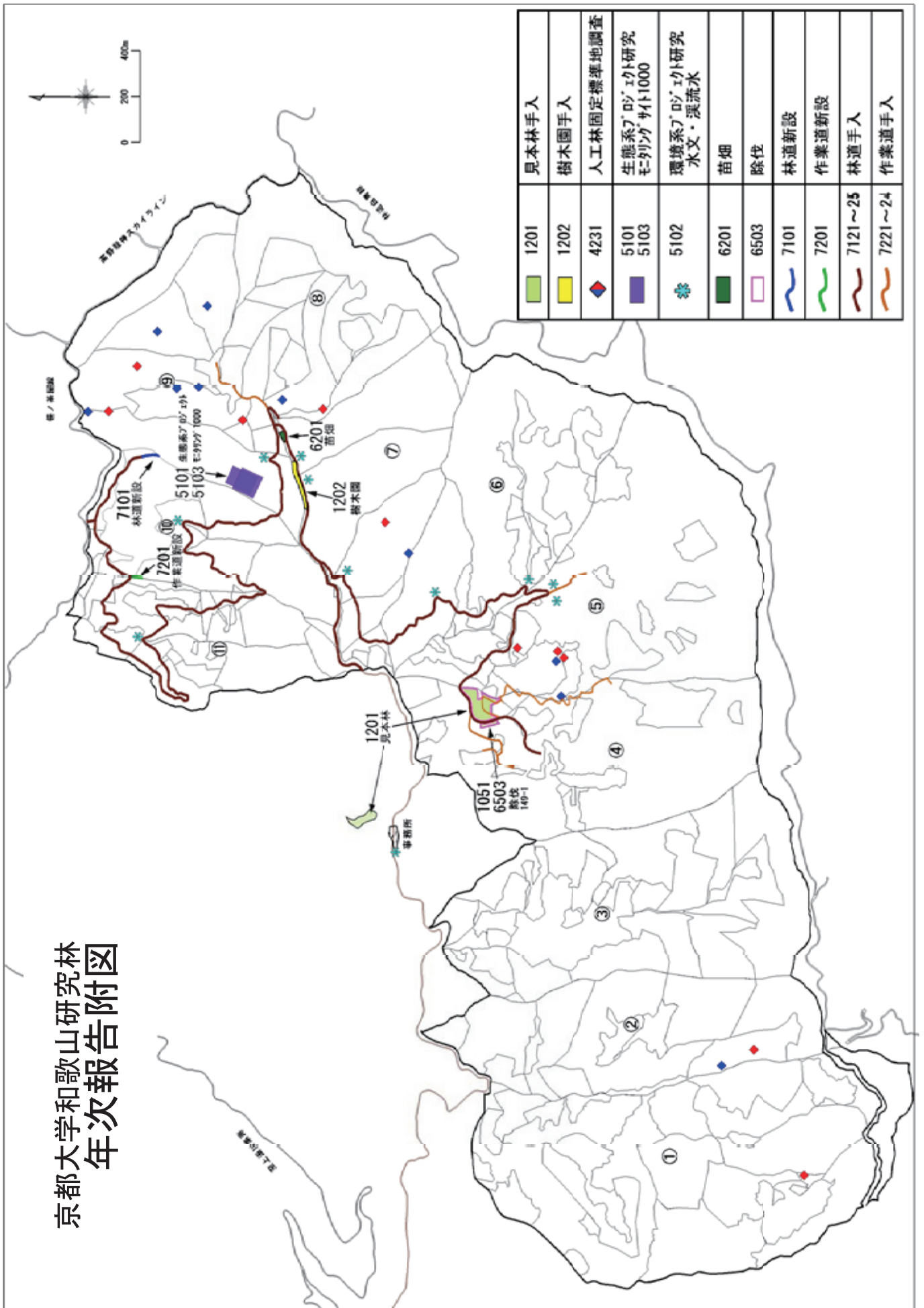
モニタリングサイト 1000



生態系プロジェクト研究



# 京都大学和歌山研究林 年次報告附图



## 上賀茂試験地年次報告

上賀茂試験地長 安藤信

### ●教育研究

上賀茂試験地では、2010年度の利用申請が計68件あり、教育、研究に市民の見学等の利用も加えると延べ2,300人が訪れた。

教育に関しては17件の申請があり、利用者数は891人であった。内訳は、フィールド研、農学部森林科学科、理学部、農学研究科地域環境科学専攻、大学院地球環境学舎、生態学研究センター等の学内の利用が12件で、学外は京都府立大学、京都教育大学、京都精華大学、京都造形芸術大学によるものであった。また、他大学の学生を対象にした「森林公開実習－近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴－」が試験地と芦生研究林を拠点として2泊3日のプログラムで始まった。

研究に関しては38件の申請があり、利用者数は730人であった。学内からの申請件数が80%近くを占め、本部キャンパスから至近の距離に所在する試験地の立地特性は、フィールドを対象とする研究者にとっても貴重である。また、民間団体からの利用も13件あり、試験地が収集した国内外の見本樹や植生が大きな魅力になっていることが伺える



公開森林実習



森林科学実習IV



理学部生物学実習B

### ●社会連携

社会連携活動として、2010年度も春と秋に2回の自然観察会を開催した。春の観察会には25名、秋には33名の参加があり、応募者にはリピーターも多い。これらの活動以外にも、学内外の諸団体が主催する観察会を積極的に受け入れた。



春の自然観察会



日中合同セミナー



ジュニア昆虫科学セミナー



## ●施設の特記事項

試験地では、2010年度の夏に水害、境界問題が発生し、ナラ枯れ被害が拡大した。

7月13日-15日に総雨量296.5mmの降雨があり、林内では林道のり面等の崩壊が2箇所、路面浸食が5箇所発生した。また、試験地境界部の水路が氾濫して、下流の試験地進入路や府道が冠水し、一部の住宅では床下浸水をもたらした。林内の被害箇所は直営作業で補修を行ったが、氾濫した水路は公共農業水路であることから京都市と協議を行い再整備等の検討を続けている。一方、試験地周辺の急速な宅地化、樹木の老齢・大径化に伴い、近年、境界部の住民からの苦情も多い。8月には試験地内の樹木が真夜中に住宅へ倒れ込むという事件が発生した。そのため、境界部の樹木調査を実施し、危険木132本37m<sup>3</sup>の伐倒を行った。

ナラ枯れは、試験地では2006年度に初めて被害が確認され、枯死木は2009年度に37本15m<sup>3</sup>と急増し、2010年度には被害はさらに拡大して77本45m<sup>3</sup>となった。被害木は伐倒、くん蒸するとともに、一部は薪ストーブの燃材として活用した。これまでに、被害を受けやすいとされるコナラ大径木や貴重なブナ科見本樹の健全木200本あまりを対象に、根元から高さ3mまでの幹部をナイロンでラッピングするという方法で、防除策を講じてきた。2010年度の京都市三山の被害量は前年と比較して4倍とされ、試験地周辺の森林と比べても被害が著しく少ないことから、ラッピングはある程度効果があるものと考えられた。

試験地では設置以来、海外の100ヶ所以上の植物研究機関と交流を持ち、種子交換業務を継続している。2010年度には芦生研究林、和歌山研究林、八丁平（京都北山）、比良山（滋賀県大津市）、そして試験地内において種子採取を行った。収集した種子は、カバノキ科、ツツジ科、ニシキギ科などが多かった。これらに前年度採取種子等4種を加え、33科73種を掲載したリストを作成し、38ヶ国135機関に送付した。これに対し38機関から、延べ315種の注文を受けた。人気が高かった種はカジカエデ、オオイタヤメイゲツなどカエデ科であった。

試験地では38科230種を発注した。その中心は過去から収集を続けているマツ科50種と、近年力を入れているブナ科29種である。受領した種子は保存状態等、質の面で問題があるものが多く、26科122種を播種し16科42種が発芽した。発芽個体も、今後生育し続けるかどうかは、十年以上にわたる根気強い管理にかかっている。なお、播種しなかった種子は、標本用として保管した。



水害による道路冠水の様子



ナラ枯れ被害木



ラッピングによる防除

表－1 リスト掲載種別種数

科 名		種数	科 名		種数
ACERACEAE	カエデ科	4	NYSSACEAE	ヌマミズキ科	1
ANACARDIACEAE	ウルシ科	3	OLEACEAE	モクセイ科	5
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	1	PINACEAE	マツ科	1
ARALIACEAE	ウコギ科	2	RHAMNACEAE	クロウメモドキ科	1
BETULACEAE	カバノキ科	7	ROSACEAE	バラ科	4
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	4	RUTACEAE	ミカン科	3
CELASTRACEAE	ニシキギ科	5	SAXIFRAGACEAE	ユキノシタ科	2
CORNACEAE	ミズキ科	1	SCHISANDRACEAE	マツブサ科	1
ERICACEAE	ツツジ科	6	STACHYURACEAE	キブシ科	1
EUPTELEACEAE	フサザクラ科	1	STAPHYLEACEAE	ミツバウツギ科	2
FAGACEAE	ブナ科	1	STERCULIACEAE	アオギリ科	1
HIPPOCASTANACEAE	トチノキ科	1	SYMPLOCACEAE	ハイノキ科	1
JUGLANDACEAE	クルミ科	2	TAXODIACEAE	スギ科	1
LARDIZABALACEAE	アケビ科	1	THEACEAE	ツバキ科	2
LAURACEAE	クスノキ科	1	VERVENACEAE	クマツヅラ科	3
LEGUMINOSAE	マメ科	1	VITACEAE	ブドウ科	2
MYRSINACEAE	ヤブコウジ科	1	合 計		73

\* 前年度採取種子3種、重複種子(採取地が異なる)1種含む

表－3 受注件数上位9種

表－2 受注状況

地 域	リスト発送数 (機関)	受注件数 (機関)	受注延べ数 (機関)	発送延べ数 (機関)
欧 州	109	31	218	208
北 米	14	4	27	26
ア ジ ア	9	3	70	65
オセアニア	3	0	0	0
合 計	135	38	315	299

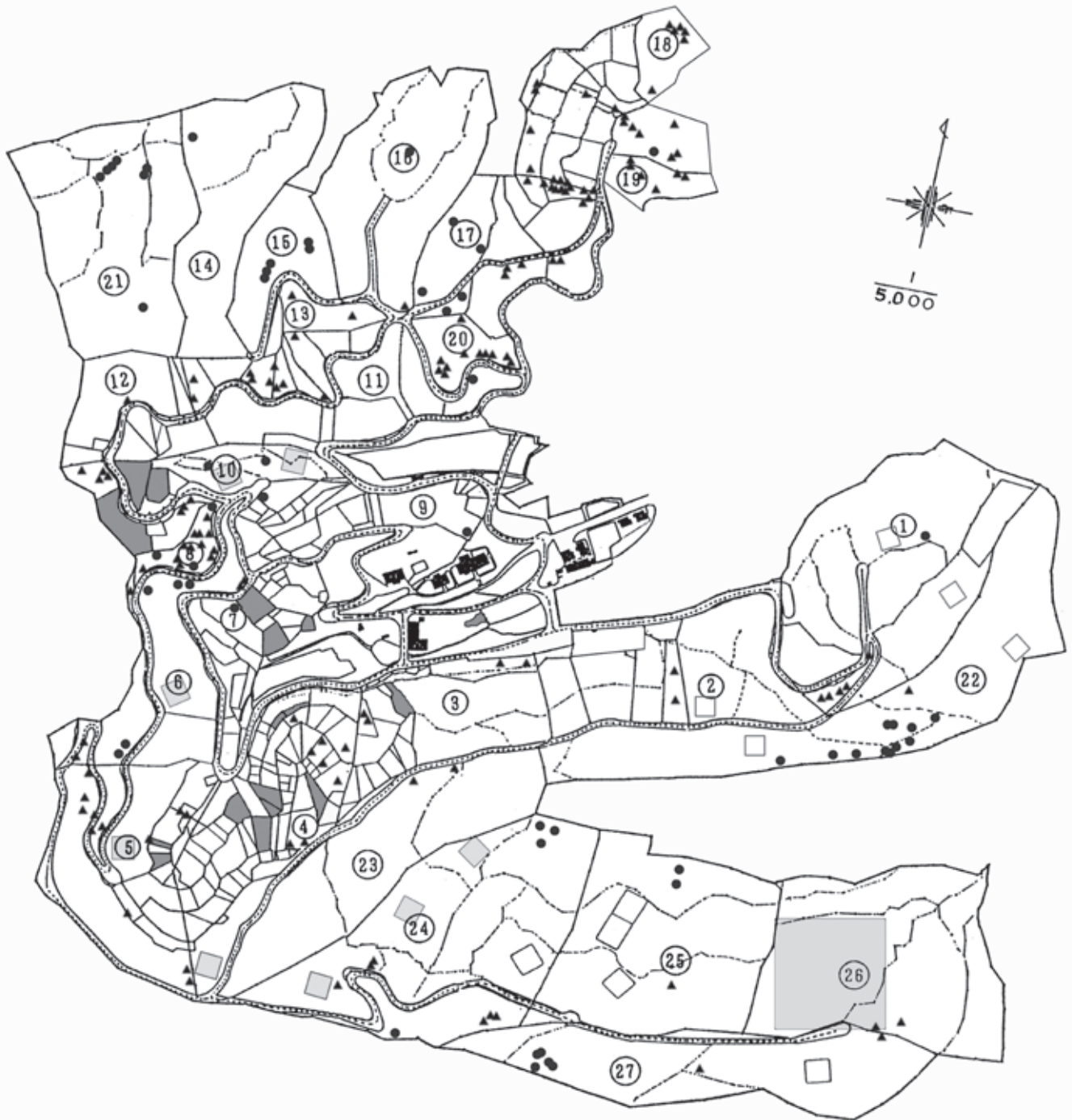
種 名	受注件数(機関)	
カジカエデ	Acer diabolicum	16
オオイタヤマメイゲツ	Acer shirasawanum	13
ミズナラ	Quercus crispula	13
モミ	Abies firma	12
ウリカエデ	Acer crataegifolium	11
ミヤマアオダモ	Fraxinus apertisquamifera	11
カナクギノキ	Lindera erythrocarpa	10
ウラジロノキ	Sorbus japonica	10
ミズメ	Betula grossaa	9





表－4 発注種数

科 名		発注種数	科 名		発注種数
ACERACEAE	カエデ科	4	HIPPOCASTANACEAE	トチノキ科	1
ANACARDIACEAE	ウルシ科	4	JUGLANDACEAE	クルミ科	1
ANNONACEAE	バンレイシ科	3	LAURACEAE	クスノキ科	1
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	2	LILIACEAE	ユリ科	1
ARAUCARIACEAE	ナンヨウスギ科	3	MAGNOLIACEAE	モクレン科	6
ARECACEAE	ヤシ科	1	MORACEAE	クワ科	3
ASPARAGACEAE	クサスギカズラ科	1	MYRTACEAE	フトモモ科	1
BETULACEAE	カバノキ科	10	NOTHOFAGACEAE	ナンキョクブナ科	1
BIXACEAE	ベニノキ科	1	OLEACEAE	モクセイ科	2
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	1	PINACEAE	マツ科	50
CASUARINACEAE	モクマオウ科	1	PLATANACEAE	プラタナス科	1
CELASTRACEAE	ニシキギ科	3	PODOCARPACEAE	マキ科	3
CORNACEAE	ミズキ科	2	ROSACEAE	バラ科	32
CORYLACEAE	カバノキ科	2	RUBIACEAE	アカネ科	2
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	18	RUTACEAE	ミカン科	2
ERICACEAE	ツツジ科	19	SAPINDACEAE	ムクロジ科	4
FAGACEAE	ブナ科	29	STRELITZIACEAE	ゴクラクチョウ科	1
GROSSULARIACEAE	スグリ科	4	TAXODIACEAE	スギ科	8
HAMAMELIDACEAE	マンサク科	1	ZAMIACEAE	ザミア科	1
				合 計	230

# 京都大学上賀茂試験地

## 年次報告附図



凡 例	
	人工林毎木調査
	天然林固定標準地調査
	マツ枯れ被害木調査
	ナラ枯れ被害木調査

## 徳山試験地年次報告

徳山試験地長 中島皇

### ●教育研究

◎「瀬戸内に見る森里海連環」(少人数セミナー(ポケゼミ):全学共通科目)の実施

特任教授向井宏先生とTA小出和彰君(森林情報学研究室 M1)の協力を得て、8/6~10の日程で実施された。昨年から再開されたゼミに、今年は定員の7名がプレハブに雑魚寝のキャンプ体制で集った。1回生男子7名(理1、薬1、工4、農1)の理系メンバーが、徳山試験地と末武川源流の烏帽子岳から瀬戸内海(大島干潟)までをフィールドとして森と里と海の繋がりを実体験した。徳山試験地としては、車(8人乗り)・冷蔵庫・炊飯器・扇風機を更新し、寝具やバーキュー道具を揃え、施設の実習用具の充実を行った。今回の実習で定員7名は人数的にはなんとか対応が可能なものだと考えている。今後、女子学生の比率が多くなった場合の検討をしておく必要がある。

◎環境学習教室「森林とふれあい自分だけのオリジナル図鑑を作ってみよう」の開催

10月23日に周南市公民館(榎浜・久米・大島・給島・菊川・中央)との共催で小学生27名と公民館スタッフ5名が試験地の森林や山を歩きながら、様々な植物や生物にふれあい、植物図鑑の作成や「ネイチャーゲーム」を通じて環境について学習した。



ポケゼミ



環境学習教室

### ●社会連携

周南市公園花とみどり課との共催で「「みどりの案内人」養成プロジェクト(周南市の事業)」特別講座」を実施した。この講座は、年3回(6月、10月、12月)日曜日の午前中に徳山試験地の作業所にある講義室で森里海連環学や森林学の講義を受講し、その後お昼までフィールド見学等を行うというもので、周南西緑地が旧徳山試験地にあたる縁から開催が実現した。受講者は各回20~40名、全体で91名の参加があった。受講生の皆さんは熱心で、環境に対する関心の高さが感じられ、講義の後には毎回多くの質問が出されていた。





「みどりの案内人」特別講座



作業所トイレ更新及び連絡通路

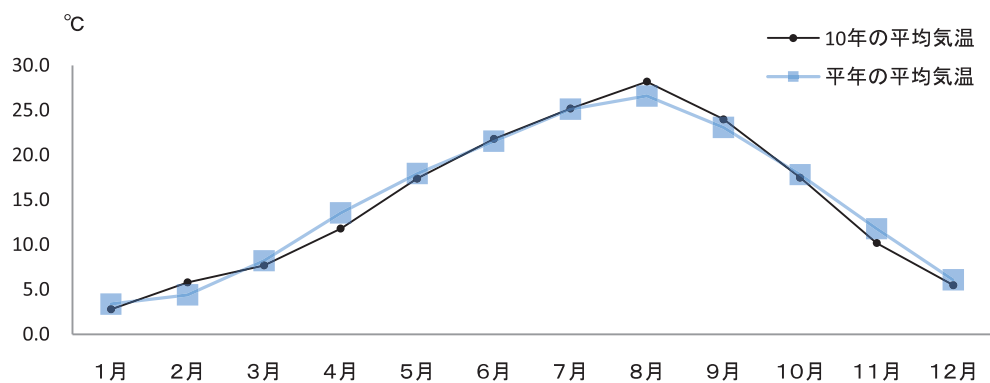
### ●その他

◎8～10月には、連日の猛暑（エルニーニョ？）と少雨により給水施設の水枯れが起きた。給水は試験地の運営・管理の基盤になる重要な課題であるため、恒久的な対策として給水ボーリング井戸設置のための予算要求を準備した。

◎作業所のプレハブトイレが老朽化し更新の要求をしていたところ、各所建物修繕費の追加予算措置があり更新・連絡通路の新設を行った。近年、周南市との共催により作業所の講義室の利用が増加しており、それに伴い受講生も増えているため、施設の充実がなされた。

◎2月13日の雪（2/14朝、事務所で積雪7cm）により3林班と2小班のヒノキ3本・0.360 m<sup>3</sup>、3林班と3小班のスギ161本・33.908 m<sup>3</sup>の雪害があった。

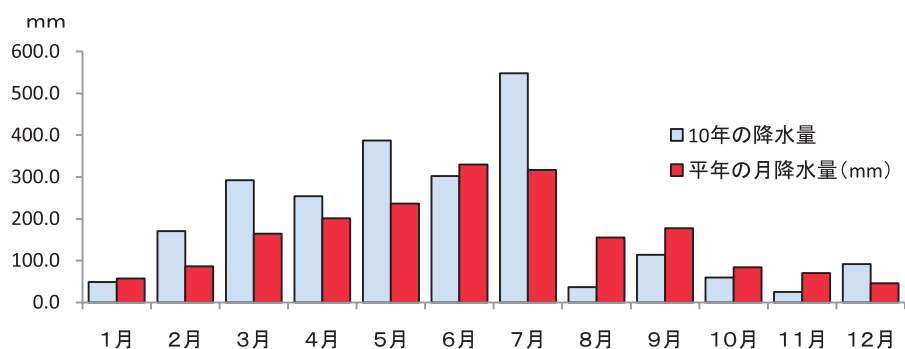
## 徳山試験地の気象環境



月平均気温平年比(2010年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(°C)	2.8	5.8	7.7	11.8	17.4	21.8	25.2	28.2	24.0	17.5	10.2	5.5
平年の平均気温(°C)	3.4	4.4	8.2	13.6	18.0	21.6	25.1	26.6	23.1	17.8	11.8	6.1

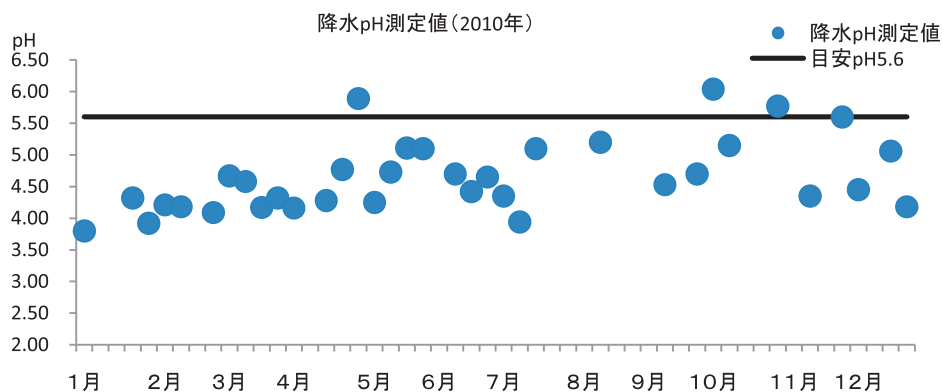
※1979年～2009年の平均気温



月降水量平年比(2010年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
月降水量(mm)	49.0	170.5	292.0	254.0	387.0	302.0	548.5	36.5	114.0	59.5	25.0	92.0
平年の月降水量(mm)	56.8	86.5	164.6	200.9	236.1	329.6	316.7	155.1	177.2	83.9	70.4	45.9

※1979年～2009年の平均気温





# 北白川試験地年次報告

北白川試験地長 柴田昌三

## ●教育研究

北白川試験地では、2010年度には合計33件の研究利用、6件の教育利用と、京都市水道局によるボーリング調査のための利用1件、合計40件の利用申請を受け付けた。年間利用者数は、延べ1855人日であり、農学研究科やフィールド研教員による利用が多かったが、学内からは理学研究科や地球環境学堂からの利用に加えて、工学研究科からの利用もあった。学外からは、大阪市立大学理学研究科と京都学園大学バイオ環境学部からの利用があった。北白川試験地は、フィールド研の施設の中で唯一本学キャンパス内に所在する施設であることから、大規模な教育・調査地の設定は困難であるが、研究室に直結した研究が可能であり、その立地を活かした教育・研究利用が盛んである。2010年度には、植栽樹木の枝葉の採取、土壌のサンプリング、植物観察等の実習や、苗畑を利用した植栽試験やガラス室内での鉢植えによる樹木類を中心とする植物の育成試験などの研究利用があった。また、他大学を対象とした森林公開実習の一環として、人間環境大学と京都学園大学の学部生を対象にした実習も行われた。

## ●社会連携

2010年度には、京都大学が主催するホームカミングデイの一環として、11月13日に、京都大学OBの皆さんが数十名、北白川試験地を訪問された。京都大学は近年、同窓会組織の充実をめざした活動を行っているが、本行事もその一部である。久しぶりの北部キャンパスを、皆さんは懐かしそうに散策しておられた。

## ●施設の特記事項

2010年度にはマツ枯れによって枯死したアカマツを4本伐採したが、これ以上のマツ枯れは認められなかった。一方、ナラ枯れ被害に関しては、試験地東側の学内通路沿いにあるシングルオークと、北側見本園のミズナラにフラスが確認されたが、量的にはそれほど多くなかったことから、経過を観察することとなった。

7月13日に台風の強風によって学内通路沿いのケヤキの大木から落枝が発生した。幸い人的被害はなかったが、境界部のフェンスが一部破損した。そのため、フェンスの修理とさらに落下の恐れがある枝の枝下ろしを請負で行った。また、当該通路は学内措置によって身障者の通路として整備が進むこととなったため、ケヤキ以外の大木についても、試験地北側と東側において越境している樹木の枝下ろしを行った。これらの作業の一部で比較的軽作業が可能な樹木については、直営で行った。

2010年度の夏は非常な酷暑であった。フィールド研の各施設では酷暑に注意し、対応した作業を行ったいたが、残念ながら、注意にもかかわらず、北白川試験地では技術職員一名が熱中症の症状を示し、救急車で搬送される事態となった。森林系技術職員の多くは林業職での採用であり、夏場の野外での業務が多いことが特徴であるが、近年の酷暑に対するさらなる配慮の必要性が考えられる出来事であった。



ケヤキの落枝で破損したフェンス



落枝を防ぐためのケヤキ枝下ろし



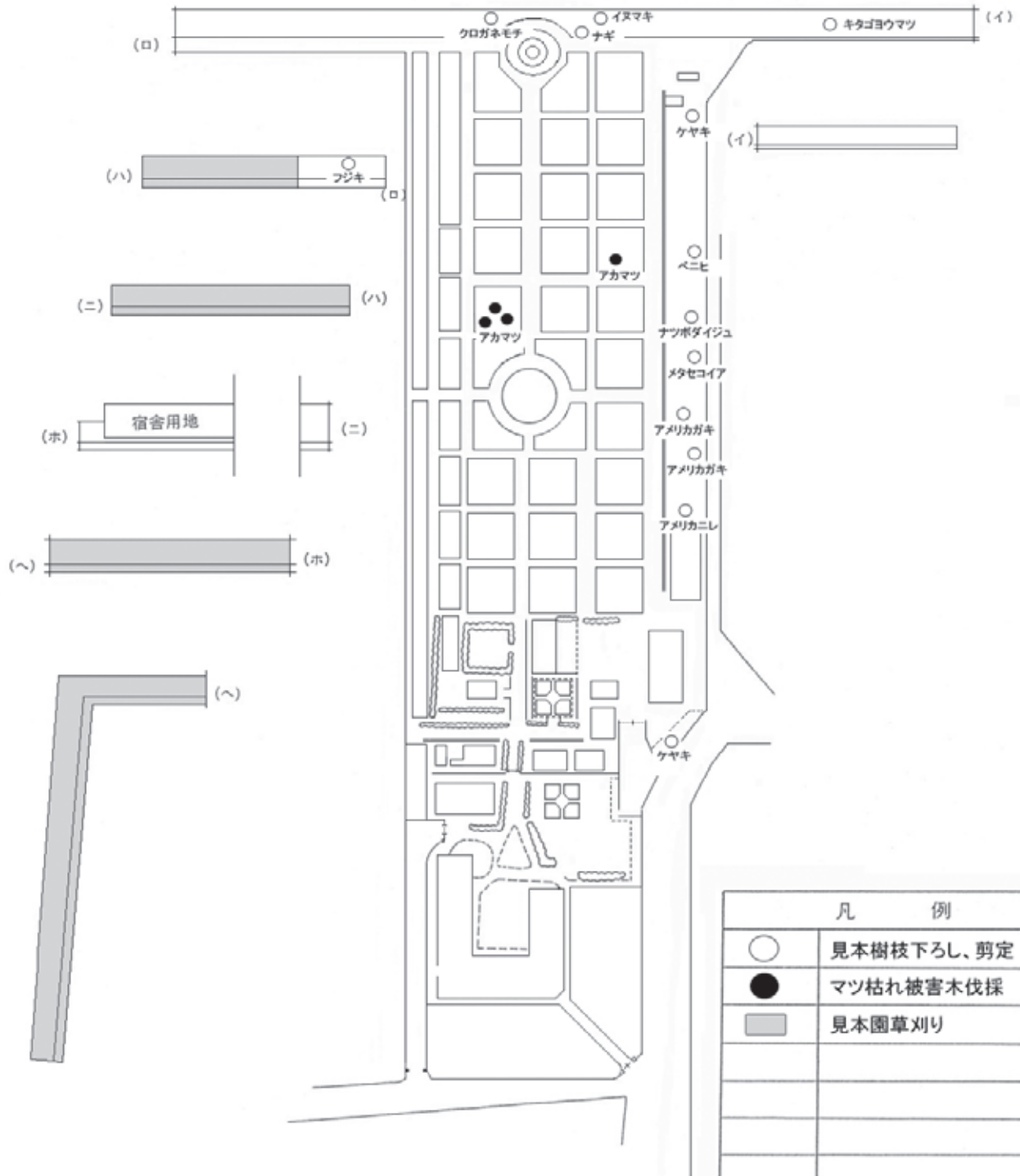


東側越境樹木枝下ろし



北側越境樹木枝下ろし

# 京都大学北白川試験地 年次報告附図



凡 例	
○	見本樹枝下ろし、剪定
●	マツ枯れ被害木伐採
■	見本園草刈り